



ISO

2018 9



「地域ぐるみ環境ISO研究会」と飯田市が主催、南信州広域連合が共催の環境ISOイベントが8月23日(火)夕から市役所で行われました。「ISO規格改訂を地域ぐるみで、環境マネジメントシステム ISO 14001 2015年版改訂にどのように準備し対応しているかを発表し合い地域全体で確認しようという狙いです。



萩本代表からは研究会の名称の「地域ぐるみ」に込めた強い思い、誕生から年末には設立20周年を迎える研究会の今日に至るまでの熱い説明がありました。これまで事業所代表者や実務者が交代するなかで研究会としての活動を続けてきましたが20年間リーダーシップを発揮してきた萩本代表の存在が大きい故に今後が難しい...



研究会事務局で環境マネジメントシステム審査員の資格を持つ多摩川精機株の福岡さんから改訂の概要説明。20分間という限られた時間、要点を絞りメリハリある説明でした。今回は特にパワーポイント、プロジェクターを使わない試みでしたので発表者はそれぞれに工夫したフリップを使い説明していました。



改訂の概要を踏まえ、取り組み形態の異なる3つの事例の発表。その1、飯田市役所の自己適合宣言。審査登録から移行し「自己」「適合」「宣言」のため独自の仕掛けは内部監査に参加するなど研究会の活動と深い連携による運用です。民間主導の研究会にあっては飯田市役所も単なる1つの参加事業所。しかし、環境モデル都市など環境施策を展開する行政という立場もあり、環境ISOの運用は市役所の中だけのものにとどまらず、地域全体を見据え、拡大発展するものであると牧野市長は結びました。



その2、光学レンズメーカーの夏目光学株。研究会参加事業所の多くが審査登録を継続していて夏目光学もそのひとつ古くからある地元企業が世界で高いシェアを持ち、そのレンズが携帯電話など身近な製品のほとんどに組み込まれていることを知りませんでした。ISOは企業の生き残りの最低条件だとも。本田管理本部長からは規格改訂には幹部社員の外部の研修受講と全社員の研修をすでに実施したと徹底した取り組みでもあった。まだまだISOは自分たちの仕組みになっていないと手厳しい評価です。地域独自の環境マネジメントシステム「南信州いむす21」の普及や支援には、もっと業種に特化した経営ツールとしてのメリットを強調した説明をすべきだとの提案も。また、人材採用募集については1社ごとが大学に出向き対応するのではなく県内諏訪地方のように地域全体での取り組みにと要望も。



その3、「南信州いむす21」の最高レベルである「ISO 14001南信州宣言」取り組み事業所の建設会社(株)三六組。長坂社長からは、審査のためのISO活動ではなく、建設業として何が環境のためになるのか、何が業務のためになるのか、その追求の結果がこの運用形態であると本音の発表がありました。地域貢献活動もその結果のひとつだと。「ISO 14001南信州宣言」ながら、審査登録を継続する品質システムの改訂対応に合わせコンサルタントによる勉強会を社員の負担も考慮し短時間で計画的に進めていると。建設業として私たちよりも自然を相手に自然を身近に感じているので、この地域の自然の良さをリニア時代に向け、自信を持ってPRすべきだと提案がありました。



今回の規格改訂の主な変更点に戦略的な環境マネジメントシステムがあり、事業プロセスの統合や他のマネジメントシステムとの統合が求められる。飯田市役所は行政評価、人事評価、環境ISOの3つを統合するための作業を進めています。2004年版からISO 14001:2015へ認証移行期間は、規格発行から2018年9月14日までの3年間です。地域独自の環境マネジメントシステムを持ち、審査・相談など支援を担っている研究会。自分の事業所のシステム対応とともに「南信州いむす21」対応も大きな課題です。

【ご意見、お問合せ】【配信解除】
 沢柳俊之(多摩川精機株) 研究会事務局
toshiyuki-sawayanagi@tamagawa-seiki.co.jp
 小林敏昭(飯田市役所) 研究会事務局
kobayashi.toshiaki@city.iida.nagano.jp



「地域ぐるみ環境ISO研究会」の「実務者会」が飯田市役所で開かれました。研究会参加事業所は現在28事業所、うち19事業所24人の実務者が出席して行われました。

研究会には2つの全体会があります。事業所の代表者と実務者の両方が集まる「事業所代表者全体会」、実務者だけが集まる「実務者会」。

まずは変更となった実務者を確認。次に、イベント運営など4つのグループで検討・準備を進めています。研究会設立20周年記念事業の確認。12月13日は、ずいぶん先のことと感じていましたが、早3月後です。

地域独自の環境マネジメントシステム「南信州いむす21」の更新審査については、審査申し込みを今年度内に予定されている事業所が11件。実務者はグループで審査員として現場に出向き更新審査を担うこととなります。協力を要請しました。

ISO14001規格の2015年版改訂に対応する「南信州いむす21」のシステム対応や審査対応については、主な研究会参加事業所がISO14001更新審査を受けた後の2018年1月以降にプロジェクトチームを編成し対応する方向とすることが確認されました。2004年版からの認証移行期間は規格発行から3年間、2018年9月14日までです。特に「ISO14001南信州宣言」4事業所、「上級」の8事業所への対応が気になりますが。

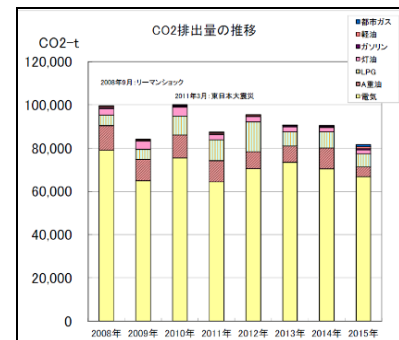
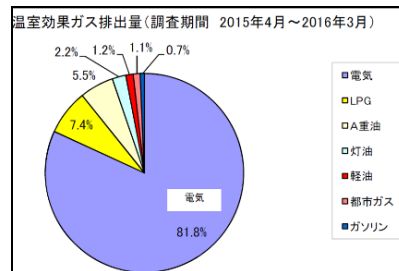


出席者からそれぞれの事業所における話題を限られた時間ながら提供し合い出席者全員の声を聞くことができました。やはり新規格への移行審査の話題は多いものの「生物多様性」「電力の自由化」「都市ガスの自由化」など異業種の集まりである研究会ならではの話題も。組織や体制の変化への悩みなどの話題は研究会運営でも共通です。

実務者会では、事務局から温室効果ガス排出量の集計結果の報告がありました。この調査は、研究会参加事業所を対象に2008年度から始めた独自の調査です。まだ8年間ですが毎年4月から3月までの1年間の結果を集計しています。

各事業所はそれぞれに温室効果ガス削減の取り組みを実施しその成果を確認しています。しかしこの地域全体の結果は把握できていません。「地域ぐるみ」で行っている私たちの活動の成果が全体としてどうなっているか調べて研究会だけでも把握したいと始めた調査です。

集計表(エクセル)をメール添付して、実務者から返信報告された情報を集計し、報告しています。様々な業種からなるとはいても多いのが電気からの排出量です。



2008年のリーマンショックによる経済活動の停滞、2011年の東日本大震災を契機としたエネルギーの使用の変化への影響もあるでしょう。

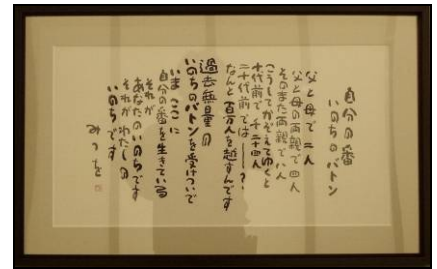
データを取得した8年間の傾向として、温室効果ガスの排出量は2割ほど削減しているようです。事業所数の増減、各事業所を取り巻く状況の変化もあり一概に言及できませんが省エネの取り組みは進んでいると考えられます。省エネ機器・省エネ機能が当たり前になりまた省エネに対する行動も定着してきていると考えられます。28事業所による研究会だけでなく、この地域全体の傾向はどうなのでしょう。

「地域ぐるみ」「点」から「面」へ裾野を広げる「ぐるみ運動」、これが研究会の原点です。「環境ISO」も。「ぐるみ」「くるみ」。研究会設立20周年記念事業に使えないかと、地元産の「くるみ」を調達しました。

見た目には汚れもあり痛いほど先が尖っている素朴なその実。ダイエットやアンチエイジングにも効果があるらしい健康食品のようです。



研究会設立20周年記念事業のタイトルは「地域ぐるみ！次へ！」。「次へ！」には多くの意味を込めています。何より研究会代表の交代、そして事業所代表者の交代、また事業所内での実務者の交代もあるでしょう。記念事業には飯田OIDE長姫高校の生徒たちも重要な位置づけで参加します。そんな様々なバトンタッチが「次へ！」なのです。



先週、参加したシンポジウムの会場近くにある「相田みつを美術館」。「自分と出逢うとき」という企画展。「自分の番 いのちのバトン」の書が唯一撮影できる場所にありました。「過去無量のいのちのバトンを受けついで」「いまここに」「自分の番を生きている」とその中にありました。研究会も20年という過去無量のバトン。何人の人たちがこのぐるみ運動に関わってきたことでしょうか。「次へ！」いかにバトンを渡せるか。

【ご意見 お問合せ】【配信解除】
 沢柳俊之(多摩川精機株) 研究会事務局
toshiyuki-sawayanagi@tamagawa-seiki.co.jp
 小林梅如(飯田市役所) 研究会事務局
kobayashi.toshiaki@city.iida.nagano.jp



「地域ぐるみ環境ISO研究会」の研究会設立20周年記念事業は4つのグループにより準備が進んでいます。

事務局として、全体の進捗管理やグループ間の調整の必要もあるためできるだけ4つの会議に参加しています。そこでいつも感じるのは、それぞれの担当者が持つノウハウ、その集積としての検討結果は凄いということです。いつも感心させられます。研究会は業種も規模も異なる事業所の集まり、それゆえものの見方、考え方の違いがそれぞれの偏ったものを補い合います。

「三人寄れば文殊の知恵」、どうやら、この言葉は「凡人」が集まる意味らしいので「凡人」ではない人たちが集まれば「文殊」に近づくのはそう難しいことではないのでしょうか。



そして、いろいろな人たちとの折衝などで驚かされることも多くあります。驚きというよりも寂しい思いをすることがあります。

高校を来春に卒業する3年生に研究会からあるメッセージを送るよう準備を進めています。飯田・下伊那にある8つの高校、窓口となる先生とのやりとりにもショックなものがあります。私たちと高校生との世代のギャップ? 教育現場での実態と自分たちの認識とのズレ?

押しつけのメッセージにしないように考えなければなりません。コミュニケーションは難しいですね。

10月20日(木)から26日(水)まで期間を設定した一斉行動週間の取り組みへの参加のお誘い予想以上に苦戦しました、大変でした。今回は依頼文書や取り組みカレンダー、報告書を郵送して依頼しました。経費もそれなりにかけていました。

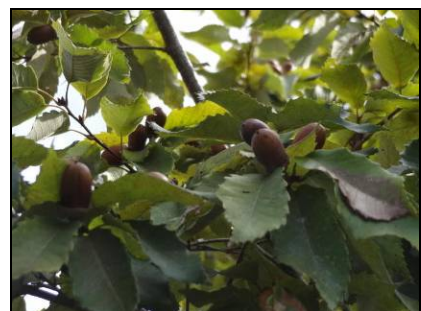
今回の呼びかけは、できるだけメールで行おうと、見つからない場合はファクシミリでと事業所のホームページなどからメールアドレスを探してみました。なかなか見つからないものです。日頃からのメールアドレスの管理は大事です。



研究会 20年の取り組みも振り返っています。研究会では飯田市が行っていた「生活と環境まつり」にブースを出して参加してきました。

当初は活動を紹介する展示だけ、立ち寄ってくれる人はわずか…。反省して、参加型のブースへ移行。里山にみんなで間伐に出かけて、間伐材を輪切りにし枝なども集め木工の材料を用意。みんなでドングリを集めてクラフト教室です。

写真は12年前11月に行われた「生活と環境まつり」での大盛況の研究会ブースの様子です。松本市や長野市で行われた「信州環境フェア」にも参加してきました。クラフト教室こそしませんでした。ドングリは研究会参加事業所へ植栽しました。大きな木に育ち実をつけています。



「ぐるみ通信」のタイトルを少し変えてみました。常に継続的改善。改善は終わることがなくいつまでも続いていきます。私たちの研究会が20年ほど前に発足した時の名は「地域ぐるみでISOへ挑戦しよう研究会」です。PDCAによる挑戦。

私たちが取り組んでいる環境マネジメントシステムの根底にあるアプローチの基礎は、PDCA Plan-Do-Check-Act という概念に基づいています。継続的改善を達成するための反復的なプロセス

- Plan : 組織の環境方針に沿った結果を出すために必要な環境目標及びプロセスを確立する。
- Do : 計画どおりにプロセスを実施する。
- Check : コミットメントを含む環境方針、環境目標及び運用基準に照らして、プロセスを監視し、測定し、その結果を報告する。
- Act : 継続的に改善するための処置をとる。

研究会という組織も運用している「南信州いむす21」という仕組みも改善すべき点として把握しているだけでもまだまだたくさんあります。組織の事情で対応できないことも実は多いものです。限られた資源と力量、その範囲内で一体どのような効果的な対応ができるか、です。

設立20周年を研究会組織や活動の見直しの大きなきっかけとしたいものです。今回は外部からの検証が記念式典で行われます。研究会はこれまでもその取り組みや課題を整理し、環境関係のコンテストに応募して、外部からの評価を受け、次のステップへの見直しを行ってきました。受賞というエールに勇気づけられ、選外という結果に反省してきました。20年間の取り組みを整理して今年も応募しています。結果を研究会の次につなげるため。

【ご意見 お問合せ】【配信解除】

沢柳俊之(多摩川精機株) 研究会事務局

toshiyuki-sawayanagi@tamagawa-seiki.co.jp

小林梅如昭(飯田市役所) 研究会事務局

kobayashi.toshiaki@city.iida.nagano.jp



「地域ぐるみ環境ISO研究会」の研究会設立20周年記念式典は12月13日(火)に人形劇場で行われます。式典は半日だけの内輪のイベントにすぎませんが、このイベントを研究会の次への大きなステップにつなげたいと、様々な取り組みが進められています。「20年」、改めてその長さと感じています。

20年を振り返り、今抱えている課題、これから何をすべきか整理したい...。環境マネジメントシステムISO 14001の規格が10年余ぶりに昨年改訂されたのも何かの縁です。今回の改訂の背景にISO運用の形骸化や有効性への疑問があります。これまでの手順や文書・記録重視からプロセスや結果の重視へと目ざすものも大きく変わっています。

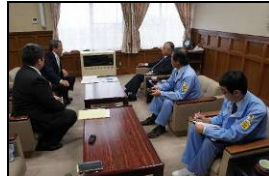
地域内の規模の小さな事業所のために運用している地域独自の環境マネジメントシステム「南信州いいむす21」も、本来の目的からのシステム改善がまさに求められています。



自分たちの組織・仕組みだからこそ把握している課題があります。しかし、変えるのには大きなエネルギーも必要でそっとしておこう、そんな課題の先送りもあります。

20周年を機に研究会「発足時」の思い「参加時」の思いを再確認していけたらと願います。20周年への取り組みで仲間の結びつきが強くなってきています。大きな力です。

研究会20年の記念誌発行をとの意見もありましたが、そのエネルギーは「次へ」使うことにしました。そんな時、縁ある「地球・人間環境フォーラム」から月刊機関誌『グローバルネット』11月号での研究会の特集を提案してくれました。原稿はメンバーで担当したものの重複など編集もきっと大変でしょう。巻頭の萩本代表へのインタビューは平野専務が飯田に来て代表から直接に時間をかけて行ってくれました。



インタビューに同席しましたが平野専務は萩本代表から本音を次々に引き出し、代表の話は聞く機会も何度もあったものの初めて聞く内容も多く驚かされました。オフレコを含めどのようにまとめるのか記念式典で配付される『グローバルネット』が楽しみです。

飯田での現地調査を踏まえ記念式典で研究会の外部検証をお願いしているのは早稲田大学大学院の松岡俊二教授です。急に連絡したいことがあったのでメールしたところ早速に返信があり助かりました。「環境省の砂漠化対策事業の会合で、モンゴルのウランバートルに来ています。ウランバートルは夜に雪が降りすっかり雪景色ですが、日中はよく晴れて良い天気です...」と。大相撲の力士の出身地でよく聞く地名、飯田の地において世界とつながるネット社会を知らされました。

20周年記念事業は研究会以外の様々な立場の人が様々に関わって成り立っています。これも研究会の長さゆえなのでしょうね。

飯田下伊那にある高等学校8校、来春の卒業予定者数は1,500人余。その卒業生の多くが進学で、また就職で飯田の地を離れて行きます。大学のない当地方では仕方のないことでしょうか。私たち研究会が取り組む環境改善活動はいったい何のためにしているのでしょうか。

取引先からの要求のため、イメージアップのため、省エネ省資源による経費節減のため、経営改善のためでしょうか。もっと純粋に私たちが引き継いだ地域の豊かな自然を、環境を次の世代へ引き渡すためでしょうか。私たちはメッセージを添えてエコバッグを1,500人余の卒業生全員に贈ることにしました。



私たち、研究会の活動が今年度、20周年を迎えます

「地域ぐるみ環境ISO研究会」は、20周年記念事業として、H29.3月に卒業するあなたに「環境バッグ(エコバッグ)」を贈ります。

卒業し、飯田の地を離れてもまた戻ってきてほしいという想いをこめて。



担当しているのは女性の実務者全員です。大きさ、デザイン、そしてメッセージ、8校への配布の調整、式典後もこの取り組みは続きます。

「南信州いいむす21」に取り組む飯田OIDE長姫高等学校生徒会に先ず記念式典で贈呈します。式典テーマは「地域ぐるみ!次へ!」です。

【ご意見、お問合せ】【配信解除】
沢柳俊之(多摩川精機株) 研究会事務局
toshiyuki-sawayanagi@tamagawa-seiki.co.jp
小林梅昭(飯田市役所) 研究会事務局
kobayashi.toshiaki@city.iida.nagano.jp